

はか
博 多 113
た

— 博多遺跡群第 154 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 943 集



遺跡略号 HKT-154
調査番号 0540

2007

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところであります。

本書は博多区須崎町における共同住宅建設に伴い実施した博多遺跡群第154次調査の記録です。調査の結果、中世博多の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり坂田俊雄氏をはじめとする多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、博多区須崎町地内において実施した博多遺跡群第154次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、安藤史郎が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は丸尾弘介が行った。
4. 本書に掲載した挿図の製図は調査担当者の他、林由紀子が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行った。
6. 本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

目　　次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
II.位置と環境	1
III.調査の記録	8
1. 調査概要	8
2. 建物	8
3. 井戸	8
4. 土坑	10
IV.おわりに	10

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成15年11月25日、株式会社ネッツより福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ共同住宅建設に伴う福岡市博多区須崎町156番における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財宝蔵地である博多遺跡群に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年12月11日に試掘調査を行い、その結果、遺構、遺物が確認された。この成果をもとに協議を重ねたが、現状での設計変更是不可能との判断から記録保存のための発掘調査を行うこととなった。事業者である坂田俊雄氏と福岡市との間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成17年8月24日より調査を開始し、9月16日に終了した。

2. 調査組織

(2005年度)

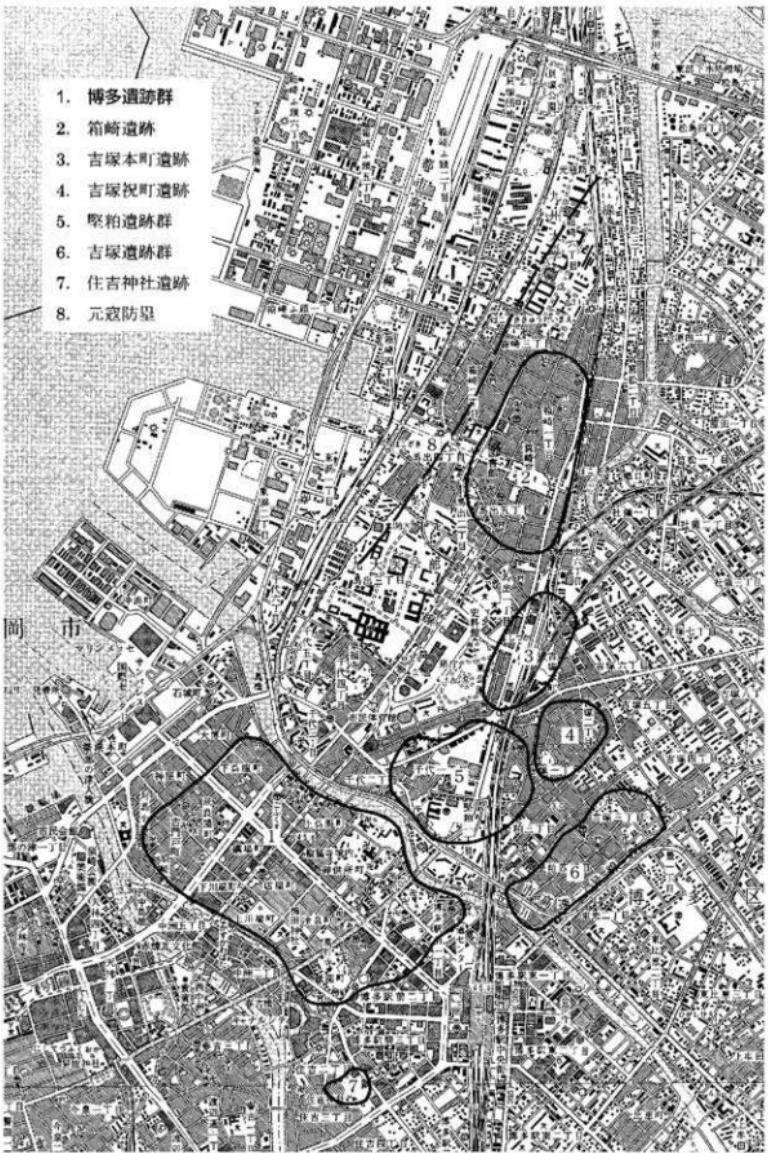
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	埋蔵文化財課長 山口 譲治
	調査第2係長 池崎 譲二
事前審査	事前審査係長 濱石 哲也
	主任文化財主事 吉留 秀敏
	事前審査係 本田浩二郎
調査庶務	文化財整備課管理係 鈴木 由喜
調査担当	調査第2係 中村啓太郎
発掘作業	宮崎雅秀 井上ヨシ子 田中フキ子 光安晶子 田端名穂子 中村幸子 花田則子 安藤史郎 阿部純子 嶋村雄介 竹原吉秋 永松弘恵 野田トヨ子 花田昌代 藤澤義一

(2006年度)

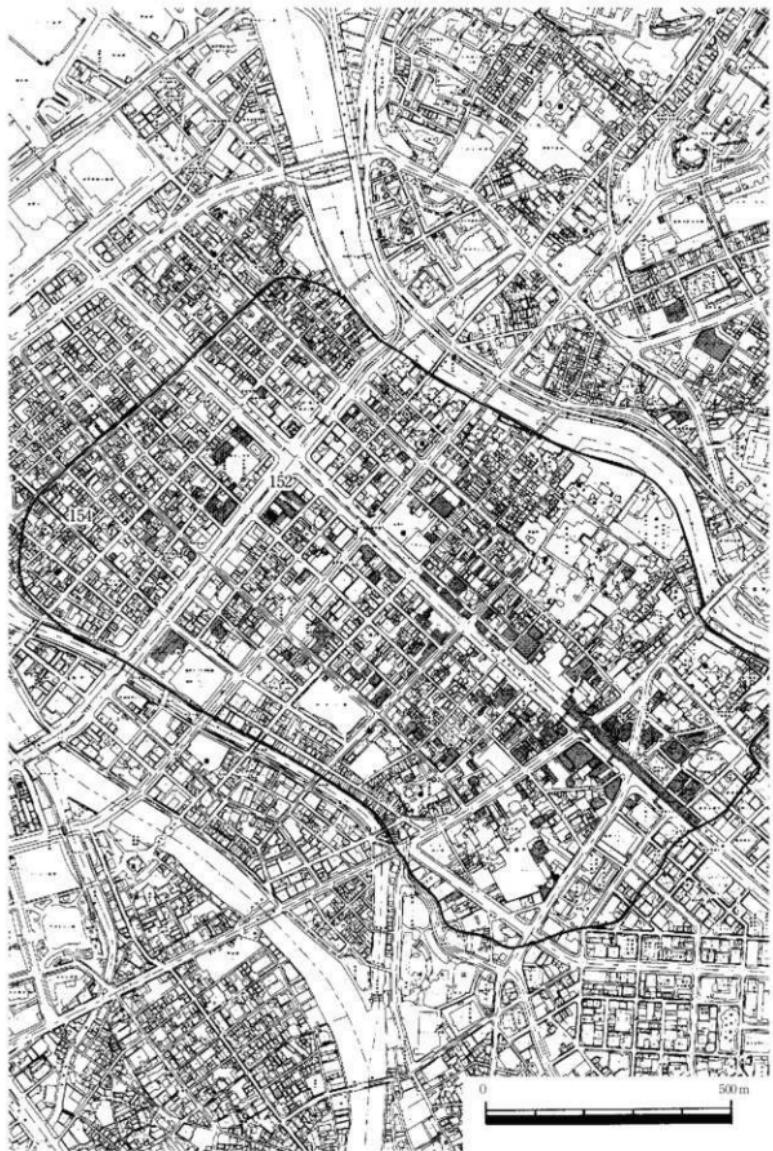
整理作業	有島美江 林由紀子
------	-----------

II. 位置と環境

博多遺跡群は博多湾に面して形成された砂丘上に立地している。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、東区箱崎から早良区百道に至る細長い分布を示しており、その形成時期は縄文時代晚期にはかなりの規模で形成されていたと考えられている。本遺跡群は弥生時代から近世に至る複合遺跡で、東西を石堂川と博多川に挟まれた東西0.8km、南北1.5km程と推定されている。この範囲は3列の砂丘で形成されており、内陸側から砂丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと呼ばれ、砂丘Ⅰ・Ⅱが「博多浜」、Ⅲが「息浜」にあたる。遺跡内の歴史的変遷を概観すると弥生時代には中期の甕棺墓と竪穴住居が確認されている。甕棺墓は砂丘ⅠとⅡとの間の谷頭を巡る形で分布している。後期には砂丘Ⅰの南斜面においても確認されている。古墳時代は砂丘ⅠからⅡの南半かけてみられ、竪穴住居跡、土壙墓、方形周溝墓が検出されており、第28次調査では全長56m以上と推定される前方後円墳が確認されており、福岡平野では大型の部類に入る。古代には遺構は砂丘



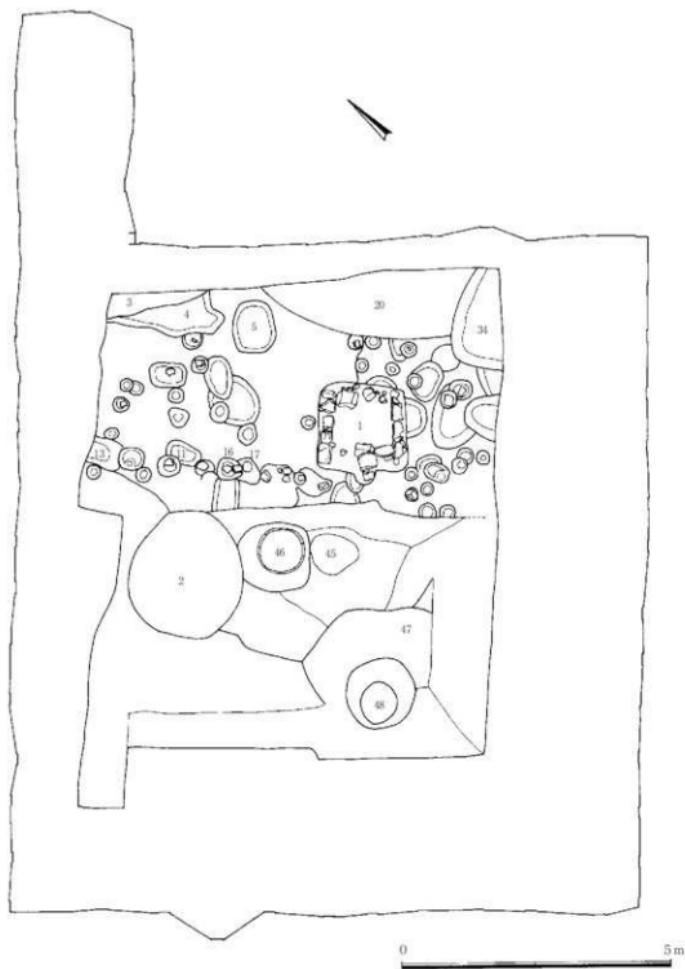
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 博多遺跡調査区位置図（1/10,000）



第3図 第154次調査区（1/2,000）

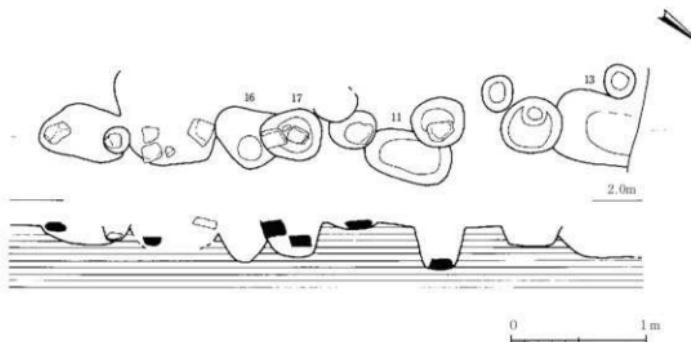


第4図 遺構配置図 (1/100)

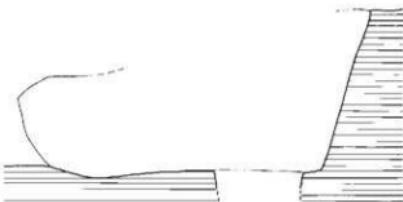
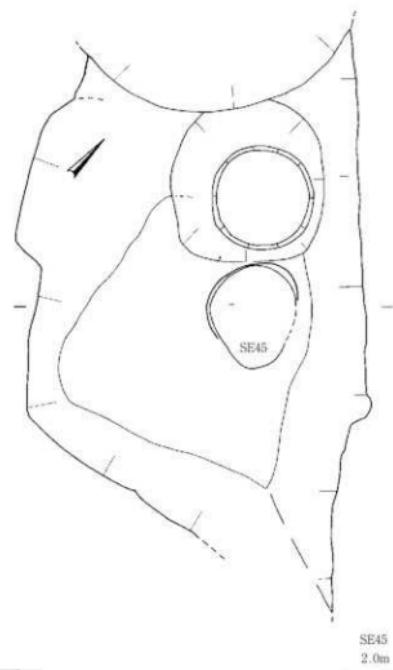
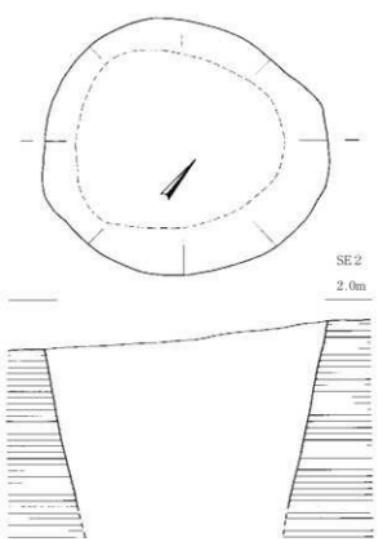
I・IIの全面に広がる。砂丘Iでは区画溝が確認され、砂丘I・IIでは帶金具・石帯・須恵器硯・墨書き須恵器が出土している。これら遺構、遺物の分布から砂丘Iに官衙施設、IIに律令官人の住居施設が存在したのではないかと考えられている。さらにはこの官衙施設は鴻臚中島館とも推定されている。中世に入ると貿易の中心が鴻臚館から博多へと移り最盛期を迎える。出土する輸入陶磁器類は質、量ともに他を圧倒している。12世紀後半には砂丘IIIに開発が進み、14世紀以降は博多の中心は「息浜」に移る。近世初頭には大規模な造成が行われ砂丘IIとIIIは完全に埋め立てられ現在に通じる地形となる。

第154次調査は遺跡群の北西部端、所謂「息浜」の西斜面に位置する。

さてこの砂丘には本遺跡群を含め多くの遺跡が立地している。周辺の遺跡をみると東より箱崎遺跡、吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、吉塚遺跡群が存在している。箱崎遺跡は弥生時代～近世にかけての遺物、遺構が確認される遺跡である。弥生時代～古墳時代は遺跡の東側を中心に分布し、古墳時代には竪穴住居、方形周溝墓が確認されている。遺跡の中心となるのは菅崎宮が創建された以降の中世で、13世紀以降は西側へ開発が進みほぼ全城に分布する。元寇時と考えられる焼土層、整地層をはじめ多くの遺物、遺構が確認されている。吉塚本町遺跡群は弥生時代～古代にかけての遺物、遺構が確認されている。特に古代は出土する瓦や硯から公的施設の存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って1996年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第1次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の壇棺墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺墓、土壙墓、古代～中世の集落が検出されており、古代においては越州窯系青磁が多量に出土しており注目されている。中世については13世紀～14世紀前半を中心に榮え、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代～古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代～古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州窯系青磁、綠釉陶器、墨書き土器等の出土遺物から公的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代～近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨泉の出土が挙げられる。



第5図 SB-50実測図 (1/40)



0 1 m

第6図 SE-2・45実測図 (1/40)

III. 調査の記録

1. 調査概要

調査は対象面積が狭小なため、事業者による矢板設置及び表土搬出時の立会から開始した。造構面の深さを確認しながら掘削土を場外に搬出し、並行して矢板を設置した。この段階で、造構面の深さが当初の想定よりも深かったため、安全対策として矢板周囲の土を残し検出作業を開始した。このため調査面積は63.1m²にとどまる。造構面は現地表より約2m程下がった標高2.0m前後の1面で、南東部が地山面である黄褐色粗粒砂で北西へ向かい傾斜し、北西部はこの地山に黄褐色細砂が堆積した面である。検出遺構は井戸、土坑、柱穴等である。遺物はコンテナ(小)で8箱出土した。

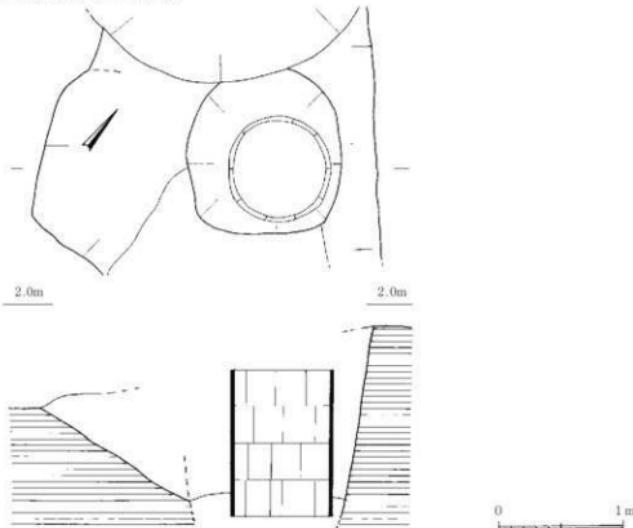
2. 建物

SB-50 (第5図)

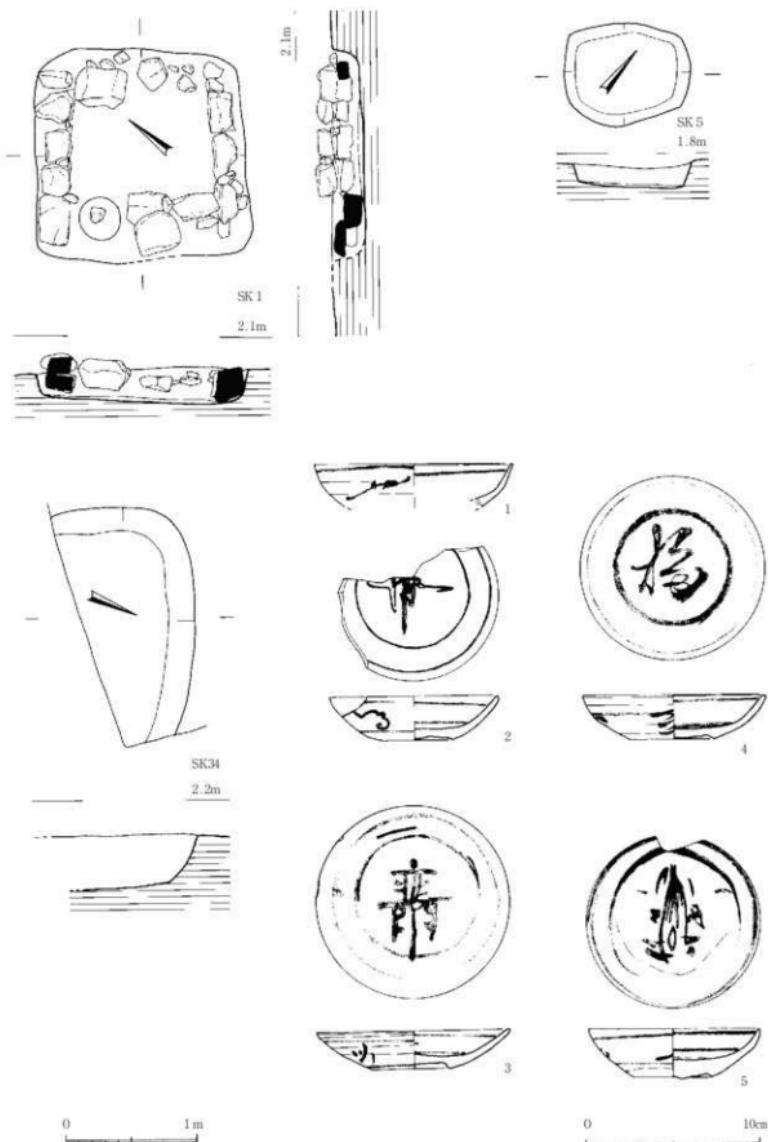
調査区中央に位置する。規模は不明。方位をN-32°-Wにとる。柱穴は径30~40cmを測り、根石を有するものが多い。切り合いがあり、建て替えが考えられる。遺物は底部糸切りの土師器片が出土している。

3. 井戸

調査区西側に集中し、5基確認した。いずれも近接しており、切り合っている。検出面ではSE-2以外プランはわからず、西方向の落ちではないか考えていた。下層で井筒を確認した段階で井戸の切り合いであることが判明した。このため、遺物の大半は一括して取り上げており、また各掘り方については不確実な部分がある。SE-45が中世後半期の可能性があるものの大半は近世以降に属するものと考えられる。



第7図 SE-46実測図 (1/40)



第8図 SK-1・5・34実測図(1/40)及びSK-34出土遺物実測図(1/3)

SE-2 (第6図)

調査区西に位置する。平面形は梢円形を呈し、壁は鋭角に立つ。長さ230cm、幅210cmを測る。標高0.3mで湧水したため、完掘できなかった。井筒は未確認。遺物は近世陶磁器類、土師器、瓦、鉄滓等が出土している。

SE-45 (第6図)

SE-2に南東に位置し、SE-46に切られる。井筒を確認した段階でわかったため、掘り方は不確実である。井筒は径70cmを測り、一部木質が確認できる。

SE-46 (第7図)

SE-2に南東に位置し、SE-45を切る。掘り方は円形を呈し、検出時で径1.3mを測る。井筒は瓦組みで4段確認できた。標高0.3mで湧水したため、完掘できなかった。

SE-47 (第4図)

調査区南西に位置し、SE-48に切られる。掘り方は不整な円形か。井筒は中央を切られるため不明。

SE-48 (第4図)

SE-47を切って位置する。掘り方は円形を呈し、井筒は瓦組である。

4. 土坑

SK-1 (第8図)

調査区東に位置する石組の土坑である。平面形は方形を呈し、掘方は一辺160cm、内法が70～100cm、深さ35cmを測る。石は北側で2段遺存し、床面に配石等はない。遺物は土師器、備前焼擂鉢、瓦、近世陶器類の細片が出土している。

SK-5 (第8図)

調査区北東に位置する。長さ90cm、幅70cm、深さ20cmを測る。遺物は底部糸切りの土師器、陶器、鉄製品等が出土している。

SK-34 (第8図)

調査区に位置する。

出土遺物（第8図）1～5は小野分類の染付皿C群。口径9.6～11.4cm、器高2.2～2.6cmを測る。他に底部糸切りの土師器、陶器、鉄滓等が出土している。

IV. おわりに

調査区は東側に柱穴、土坑等が、西側に井戸が分布する。これは現状の道路に面して建物、その裏に井戸を配置した空間構成となる。建物は方位をN-32°-Wにとり、現状道路より僅かに東に振れている。遺構の年代はSK-34が15世紀後半～16世紀と考えられ、SE-45が中世に属する可能性があるが、大半は近世の所産と考えられる。

本調査地点は遺跡の北西端にあたる。調査区は北西に向かい傾斜しており、地山面は調査区際で標高1.1mを測る。湧水点が標高0.4m前後であることや試掘の成果からこれより先の居住施設の遺構密度は極めて低いと考えられる。



調査区東全景（南から）



調査区西全景（南から）

図版2



SE-2 (北から)



SK-1 (南から)

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多 113						
副書名	-博多遺跡群第 154 次調査報告-						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第 943 集						
編著者名	中村啓太郎						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号						
発行年月日	2007 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
はかた 博多遺跡群 154 次	ふくおかしはかたくすざきまち 福岡市博多区須崎町 156 他	40130	020121	33° 35' 40"	130° 24' 10"	20050824 ~ 20050916	138.9 共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群第 154 次	集落	中～近世	井戸 石組土坑 土坑 柱穴	明代染付 土師器 肥前系陶磁器			

博多 113

-博多遺跡群第 154 次調査報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告第 943 集

2007 年(平成 19 年)3 月 30 日
発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神 1-8-1)
印刷 株式会社博多印刷
(福岡市博多区須崎町 8-5)